

## 村山様からの追加指摘事項

### 論点1

- ・ 市民や消費者の多様性を考慮すべきで、関心のレベルに応じた対応が求められているように思われる。
- ・ 時間やコストをかけて安全・安心を追求する人々もいれば、全く関心を持たない人々もいる。
- ・ 無関心な人々に対しては、事故や急性毒性につながる情報は最低限、適切に提供すべき。
- ・ 少しでも関心がある人々に対して、ニーズに応じた情報提供や情報交流、意味ある応答を行うことができるかが肝要。
- ・ 多様性を考慮するには、ソーシャルマーケティングにおけるセグメントアプローチが参考になるかもしれない。

### 論点2

- ・ 情報を求めるレベルは様々で、簡単な情報から詳しい情報まで階層性のある情報の提供方法を検討してはどうか。
- ・ 意思決定の透明性をどのように確保するかは、古くて新しい課題。特定のリスクを例にして、モデルを設定してはどうか。

### 論点3

- ・ 第三者としての学会の位置づけも一考の価値があるかもしれない。
- ・ 学術審議会の安全・安心部会？（みずほ注：安全・安心科学技術委員会と思われそうです）の動きの関係で、私が事務局長を務めている日本リスク研究学会では、取り組むべきトピックの一つとして、リスクコミュニケーションを位置づけ、科学技術振興機構（JST）と共同して幅広い検討を開始している。化学物質に特化したものではないが、一つの参考事例を提供できるかもしれない。
- ・ 小出氏の話提供にあった英国の SAGE ( the Scientific Advisory Group for Emergencies : 緊急助言グループ ) のような組織について、日本での実現可能性についても検討していただけるとありがたい。